１３	豊橋	豊橋市立牛川小学校	ムトウ　ケイジ 名　前　武　藤　敬　治

分科会番号	２０	分科会名	総　合　学　習

探究学習を通して，地域社会に参画することができる子の育成

―第６学年総合的な学習
「ぼくたちの誇り牛川～自分たちにできるまちづくり～」
の実践を通して―

１　主題設定の理由

新型コロナウイルスの流行により，学校や校区による行事を以前のように行うことが困難になり，地域社会とのつながりが途絶えた。昨今では規制が緩和され，子どもたちと地域のつながる機会が増えてくるであろうと考えていた。しかし，昨年度５年生を担当しているとき，子ども会の活動に対し「塾があるから行かない」「友達と遊ぶから行かない」という子どもたちの声を耳にした。コロナ禍の影響や新しい世帯が増えたことなどによって地域社会とのつながりが薄いという危機感を抱いた。その後，昨年度５年生の総合的な学習で校区の防災訓練に関心をもったり，地域の方に防災対策を呼びかけたりするなど，子どもたちは地域に目を向け始めていた。今年度，最高学年になった子どもたちが，地域社会に参画することで地域とつながることができる機会だと考えた。地域社会に参画することは，精神的な充実感につながり，変化の激しい地域の多様な問題を解決する生きる力になる。本研究では，牛川校区のまちづくりを地域教材として取り上げる。牛川校区は，まちづくりについて地域の人々の関心が高い。また，校区内に新しい公園が３つできると予定されている。子どもたちにとって好きな牛川校区は，自分が生まれ育った場所であるため，地域の課題は共感できるものが多く，切実感をもって自分事としてとらえることができる。そのため，子どもたちは好きな牛川校区をよくしていこうと，自ら課題を設定し，解決をしようと探究することができると考えた。地域の方やまちづくりに関わっている方の協力のもと，牛川校区のまちづくりについて探究する中で，自分たちもまちづくりに関わることで地域社会に参画することができる教材だと考え，本研究を設定した。

２　研究のねらい

（１）目ざす子ども像

（２）研究の仮説

探究学習を通して，地域社会に参画することができる子

仮説１　児童の思考に沿った探究的プロセスを設定し，プロセスの中にまちづくりに関わっている方との関わりを設けることで，課題を解決しようと探究することができるだろう。

仮説２　地域教材を取り扱ったり，まとめ・表現の場面で評価を受けたりすることで，地域とつながっていることを実感し，より地域社会に参画することができるだろう。

（３）研究の仮説に対する手だて

①仮説１に対して

手だて①　探究的プロセスの設定

「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」の探究のプロセスを繰り返し位置づけていく。子どもたちが抱いた課題の解決に向けて，子どもの思考に沿った学習の流れにすることで，探究的に学習することができると考える。

手だて②　まちづくりに関わっている方（市役所の方）との関わり

まちづくりに関わっている方と，継続的に関わる機会を設けていく。まちづくりについての知識を教えてもらったり，新たな問いを投げかけてもらったりする。まちづくりに関わっている方とつながることで，協働的に取り組み，探究できると考える。

②仮説２に対して

手だて③　地域教材の活用

本研究では，牛川校区のまちづくりを教材化する。牛川校区は生まれ育った場所であり，

多くの子どもたちが牛川校区を「好き」と答えていて，とても身近な教材である。まちづくりについて学び，自分たちがまちづくりをしていく中で，地域の人々のまちづくりに気づき，地域とのつながりを実感することができると考える。

手だて④　まちづくりに関わっている方や地域の方からの評価

「まとめ・表現」の場面では，子どもたちが発信した後に，聞き手から評価をもらう。新しい公園の案を発表する場面では，まちづくりに関わっている方から評価をもらう。まちづくりをしていくことの決意表明をする場面では，地域の方から評価をもらう。それぞれの場面において評価をもらうことで，自分たちの学びが実社会とつながっていることを実感し，地域参画の意義を理解し，将来にわたって地域社会に参画しようとすることができるようになると考える。

（４）抽出児童について

単元前のアンケートに「牛川校区が好き」であり「地域のためにできることはしたいけど，何ができるかはわからない」と答えたＡ児を抽出児童とする。Ａ児は，課題を見出し，課題を解決するために行動することができる。５年生時には，防災学習において，学校の備えに危機感をもち，アルミ缶を集めてヘルメットを購入した。周りのためにはたらきかけることができるＡ児のよさを伸ばしていきたい。Ａ児が，まちづくりについて探究し，牛川校区をより住みやすいまちにしようと地域社会に参画する姿に期待する。

３　本研究の単元計画

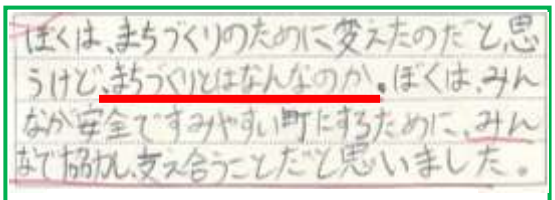
課題（時間）	主な活動内容	手だて
１　牛川校区や牛川小学校の様子が今と違うのはなぜだろう（６）	・５月に行われるドローン撮影をきっかけに過去の航空写真を用いて，現在と過去のまちの様子を比較する。 ・なぜまちのようすが変わったのかを疑問を抱き，調べる。 ・まちづくりとは何かという課題をもつ。	手だて１ 【課題の設定】
２　まちづくりってなんだろう（３）	・まちづくりとは何かを調べる。	手だて１ 【課題の設定】
３　まちづくりに関わっている方の話を聞いてみよう（１）	・まちづくりに関わっている方の講話を聞き，まちづくりとは何かを知る。 ・牛川校区に今後新しい公園ができることを知る。	手だて１ 【情報の収集】 手だて２ 【まちづくりに関わっている方との関わり】
４　牛川校区の未来を描こう（１）	・まちづくりに関わっている方の投げかけから，牛川校区がどういうまちになってほしいのかを想い描く。	手だて１ 【整理・分析】
５　みんなが住みやすい牛川校区にするために，自分たちにできることはなんだろう（１）	・思考ツールを用いて，これから活動していこうとする自分たちにできることを明確にする。	手だて１ 【課題の設定】
６【自分たちにできること①】新しくできる公園の案を考えて，まちづくりに関わっている方に伝えたい（16）	・牛川公園や牛川遊歩公園を見学する。インタビュー活動をして実際の声を聞いたり，見学して公園の工夫に気づいたり課題を見出したりする。 ・みんなが利用しやすい公園にするために，さまざまな人の立場になって考える。 ・さまざまな人の立場の中に，自分たちという視点を取り入れる。 ・公園を見学したときに気づいた課題を解決する。 ・まちづくりに関わっている方に，新しくできる公園の案を発信する。	手だて１ 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ･表現】 手だて２ 【まちづくりに関わっている方との関わり】 手だて４ 【評価】
７【自分たちにできること②】体の不自由な方が利用しやすい学校にしたい（１・休み時間）	・体の不自由な方が利用しやすい学校にするための方法を考え，話し合い，行動する。	手だて１ 【情報の収集】 【整理・分析】
８【自分たちにできること③】ごみ拾いをして，より住みやすくしたい（４）	・ごみ拾いの実施について話し合い，実際にごみ拾いをする。 ・ごみがあまり落ちていないことに気づき，どんな人が拾っているのかを調べる。	手だて１ 【情報の収集】 【整理・分析】
９　地域の人たちはどんなまちづくりをしているのだろう（１）	・ごみ拾いの他にどんなまちづくりをしているのかを知る。感謝の気持ちや自分たちもまちづくりをしていこうとすることの思いを抱く。	手だて１ 【情報の収集】 【整理・分析】
10　これからはぼくたちもまちづくりをしていくよ（１）	・創立 150 周年式典で，地域の人に向けて自分たちもまちづくりをしていくことの決意表明をする。	手だて１ 【まとめ･表現】 手だて４ 【評価】

手だて３

４　研究の実践

（１）牛川校区や牛川小学校の様子が今と違うのはなぜだろう

牛川小学校創立 150 周年を記念し，５月に全校児童が運動場に集まり，ドローン撮影が行われた。その当日，過去の航空写真を子どもたちに見せた。子どもたちは資料を見ると，すぐに現在のまちの姿と何が違うのかを探し始めた。昔は畑や田が多かったことや道路が曲がっていることに気づいたり，運動場の位置が変わったりするなど，牛川校区や小学校が大きく変化していることに驚きを隠せない様子であった。Ａ児は「何でわざわざ遠くになったの」と，なぜ運動場の場所を変える必要があったのかという疑問をもち始めた。Ａ児は，図書室にある牛川校区や牛川小学校に関する歴史が載っている「うしかわ」という資料に目を向け，調べた。そこで『まちづくり』というキーワードに着目した。Ａ児は振り返りに「まちづくりはなんなのか」と書き，更なる課題を見出すことができた【資料１】。


ぼくは、まちづくりのために変えたのだと思うけど、まちづくりとはなんなのか。ぼくは、みんなが安全ですみやすい町にするために、みんなで協力、支え合うことだと思いました。

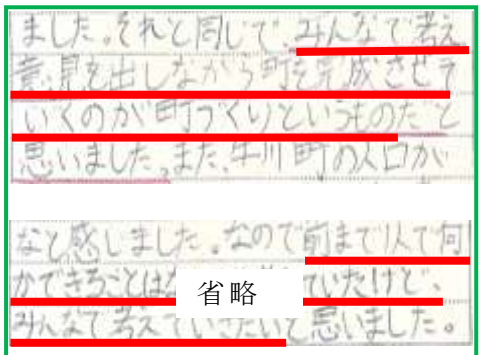
【資料１】Ａ児の振り返り

（２）まちづくりってなんだろう

「まちづくりとは何か」と，疑問を抱いた子どもたちに対して，調べる時間を設けた。子どもたちは，本やタブレットでまちづくりについて調べるが，理解が深まらない様子であった。Ａ児もその一人である。そこで，まちづくりについて詳しく知るために，まちづくりに関わっている方を招いて話を聞くことにした。

（３）まちづくりに関わっている方の話を聞いてみよう

まちづくりに関わっている方を招き，まちづくりについての講話を設けた。「今の牛川校区は道が整備されたり住宅が増えたりしてとても住みやすいまちになっている」「長い時間をかけ，たくさんの人が関わって，考え，話し合って，今の住みやすい牛川校区ができた」など，さまざまな視点から話をしてもらった。また，住みやすいまちにしていくことを『まちづくり』と教えてもらった。最後に，まちづくりに関わっている方は「未来に向け，どんな牛川校区にしたいですか，まずは想い描くことが大切」「例えば，牛川校区にはこれから新しい公園ができます。どんな公園にしたいですか」と，子どもたちに投げかけた。Ａ児は講話を受けて，まちづくりについて理解を深めた【資料２】。


ました。それと同じで、みんなで考え意見を出しながら町を完成させていくのが町づくりというものだと思いました。また、牛川町の人口が

なと感しました。なので前まで人で何かできることは　省略　ていたけど、みんなで考えていこうと思いました。

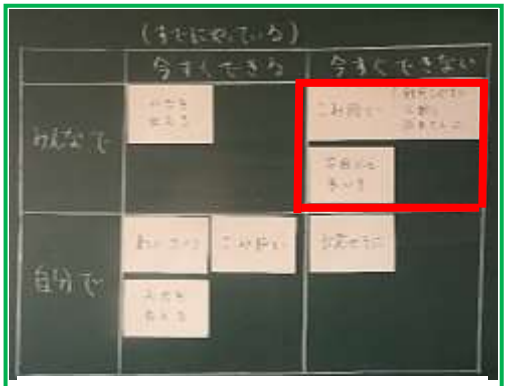
【資料２】Ａ児の振り返り

（４）牛川校区の未来を想い描こう

まちづくり講話を受け「牛川校区をどんなまちにしたいのか，未来を描いていきたい」と振り返りに記述した子が多かった。そこで「牛川校区の未来を想い描こう」と，話し合う時間を設けた。子どもたちからは「高齢者が住みやすいまちにしたい」「外国人も住みやすいまちにしたい」などの意見が出た。Ａ児は「障がい者の方も安心して住みやすいまちにしたい」と，みんなに伝えた。子どもたちはさまざまな人の立場を考え，誰もが住みやすい牛川校区にしたいという想いを描いていた。「多くの立場が出てきたから，それを『みんな』にすればいいと思う」「みんなが住みやすいまちになるといいな」という子の意見に対し，他の子は頷きながら聞いていた。そして「みんなが住みやすい牛川校区」をキャッチフレーズに掲げた。Ａ児は「みんなが住みやすい牛川校区にするために，自分たちにできることをみんなで考えていきたい」と，目標を掲げていた。

（５）みんなが住みやすい牛川校区にするために，自分たちにできることはなんだろう

みんなが住みやすい牛川校区にするために，自分たちにできることは何かを話し合った。子どもたちが自分たちにできることを明確にするために，思考ツール（マトリクス）を用いた。子どもたちは，自分たちにできることのキーワードを４つの部屋に分けた【資料３】。「自分で今すぐにできるものについては，今日からやっていこう」と，子どもたちは意識を高めた。子どもたちは，みんなでやらないと解決できないものについて，順に取り組んでいくことにした。子どもたちから「公園の案を考えるために牛

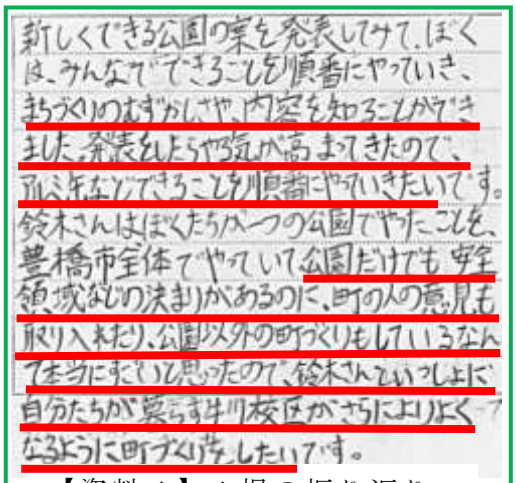


【資料３】思考ツール(マトリクス)

川校区にある公園を見に行きたい」という声があがった。そこで，まずは今ある公園を見学し，新しくできる公園の案を考えていくことにした。

（６）新しくできる公園の案を考えて，まちづくりに関わっている方に伝えたい

現状を把握するために，子どもたちにとって人気である牛川遊歩公園と牛川公園を見学した。子どもたちは公園を利用している人にインタビューをしたり，公園にはどんな工夫があるのかを探したりした。Ａ児は，高齢者の方にインタビューをした。Ａ児にインタビューで聞いた内容を尋ねると「暑いから日陰がほしいと言っていた。高齢者や障がい者が安心して利用できる公園にしたい」と，意気込んでいた。しかし『みんなが住みやすい』の『みんな』に含まれているのは高齢者や障がい者だけではないことにはまだ気づいていない様子であった。そこで，子どもたちに「みんなって誰のことかな」と聞くと，Ａ児を含めた子どもたちからは「車椅子を利用する人」「ペット連れの人」「外国人」などの声があがった。みんなが利用しやすい公園の案を考えていく上で，さまざまな人の立場を考えなくてはいけないと理解することができた。また，Ａ児は公園を見学して「木がたくさんあって，全体がひかげになっているので暑さを気にせず利用できる」と，長所に気づいた一方で「木がたくさんあるがゆえに根っこがみえてしまっていて転んでしまうかもしれない」と，課題を見つけることもできた。Ａ児の他にも多くの子が高齢者や小さい子が根につまずいて転ぶかもしれないと，危機感を抱いていた。木の根が出ていて危ないと危機感を抱いた子どもたちに「公園に木を植えた方がよいのか」と聞くと，意見が分かれた。インタビュー時に子ども連れの大人の方から「遊具が熱くて使えない」と聞いた子は，遊具の近くに木を植えて日陰を作ればよいと考えていた。一方で，木を植えることによって木の根が出たり枝が落ちたりして危ないと考える子もいた。そこで，まちづくりに関わっている方を招き，質問を投げかけてみると「遊具から２メートル以内には木を植えてはいけない」という安全領域に関するルールがあることがわかった。ルールを含めた上での話し合いを行った。Ａ児は安全領域を知り，それを踏まえた上で「遊具にも屋根をつければそれはそれですずしくなるんじゃないか」と，考えた。話し合いの結果，遊具ゾーンの周りに木を植えようとする案になった。また，日陰が作れないから，遊具が熱くならないように屋根つきの遊具にしたり，素材を金属ではなくプラスティックにしたりするのはどうかという案もまとめることができた。まちづくりに関わっている方(以後，市役所の方)に伝えるために，子どもたちで役割分担をしながら，リーフレットにまとめたり，プレゼンテーションに必要な資料を作ったりした。そして，市役所の方を招き，子どもたちは自分たちが考えた新しくできる公園の案を発表した。発表した子どもたちに対し，市役所の方から評価を話したり書いたりしてもらった。市役所の方は，難しい課題にも諦めず，みんなで課題を解決していこうとする子どもたちの学ぶ姿勢を大きく評価した。そして，市役所の方は「自分たちの暮らす牛川校区がいいまちであり続けるために，一緒になって『まちづくり』していきましょう」と，子どもたちに呼びかけた。発表を終え，市役所の方からの評価を聞いたＡ児は「まちづくりのむずかしさや，内容を知ることができました。発表をしたらやる気が高まってきたので，アルミ缶などできることを順番にやっていきたい」と，記述した【資料４】。このことから，新しくできる公園の案を考えていく上で，市役所の方から知識を得ながら，難しい課題にも解決しようと取り組んできたことが見て取れる。自分たちにできることの一つ目を終えたばかりだが，次の課題にも目を向け，意欲が高まっていることがわかる。更に，Ａ児は「公園だけでも安全領域などの決まりがあるのに，まちの人の意見も取り入れたり，公園以外のまちづくりもしているなんて本当にすごいと思ったので，鈴木さんといっしょに自分たちが暮らす牛川校区がさらによりよくなるようにまちづくりをしたい」と記述している。自分たちが経験したように，さまざまな課題を解決していきながら，住みやすいまちづくりを目ざしている市役所の方のすごさを知ることができた。市役所の方からの評価を聞いて『鈴木さんといっしょに』まちづくりをしていこうとするＡ児の気持ちが更に高まったことがわかる。


新しくできる公園の案を発表してみて，ぼくは，みんなでできることを順番にやっていき，まちづくりのむずかしさや，内容を知ることができました。発表をしたらやる気が高まってきたので，アルミ缶などできることを順番にやっていきたいです。鈴木さんはぼくたちが一つの公園でやったことを，豊橋市全体でやっていて，公園だけでも安全領域などの決まりがあるのに，町の人の意見も取り入れたり，公園以外の町づくりもしているなんて本当にすごいと思ったので，鈴木さんといっしょに自分たちが暮らす牛川校区がさらによりよくなるように町づくりをしたいです。

【資料４】Ａ児の振り返り

（７）体の不自由な方が利用しやすい学校にしたい

自分たちにできることの二つ目として，校内に車椅子がないことに気づいたＡ児を中心に，アルミ缶を回収して，車椅子を購入しようと考えた。車椅子は３万円以上かかる。それを調べた子どもたちは，早い時期から回収できれば卒業までに達成できると見込んでい

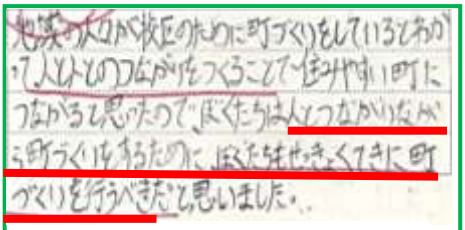
た。そこで，アルミ缶をどうやって回収していくのかをみんなで話し合った。子どもたちからは，周りに呼びかけたり，体育館前にある回収ボックスのアルミ缶を車椅子の購入に回してもよいのかをお願いしたりすることがあがった。しかし，Ａ児は「まずは自分たちがアルミ缶を持ってくるべきだと思う」と，みんなに呼びかけた。Ａ児の発言によって，まずは自分たちで継続的に持ち寄り，その後呼びかけたりお願いしたりするという見通しをもった。Ａ児を含め，子どもたちは自らアルミ缶を持ち寄る姿が見られた。その後，Ａ児は児童会だよりや放送で全校児童に呼びかけた。また，教頭先生の「150 周年記念式典に，車椅子を利用する方から連絡があって，学校に車椅子があるか問い合わせがあった」という話を聞いた子どもたちは，学校の車椅子を実際に必要としている地域の人がいることを知ることができた。車椅子を必要としている地域の人がいることを知ったＡ児は，アルミ缶を持ち寄ったり，全校児童が持ってきた缶やボックスの缶を回収したりする活動を継続的に行うことができた。

（８）ごみ拾いをして，より住みやすくしたい

自分たちにできることの三つ目として，子どもたちはごみ拾いの計画を立てた。拾う場所は，学校の近くの川や公園にしようと，朝倉川や牛川遊歩公園の清掃活動をすることになった。子どもたちは，より広い範囲のごみを拾いたいと，学級ごとに拾う範囲を設定し，ごみ拾いを行った。ごみ拾いを終えてＡ児は「意外とごみが少ないと思いました。もっと多いと思ったので，びっくりしました。ぼくたちだけではなく地域の人たちがまちづくりのためにふだんから拾ってくれているんだな」と，振り返りに記述した。ごみがあまり落ちていない現状に，Ａ児は驚いたことがわかる。更に，Ａ児はごみ拾いを通して，ごみが落ちていないのは地域の人たちが関係しているのではと予想し，自分たちだけがまちづくりをしているわけではないことに気づくことができた。他の子どもたちについても，ごみが予想以上に少なかったと振り返りに書いた子は，20 人以上いた。実際にどんな人が拾っているのかと，疑問をもった子もいた。子どもたちはどんな人が拾っているのかを調べると，朝倉川では会社の団体や高校生などが拾っていることがわかった。牛川遊歩公園では，事前に青陵地区市民館の館長さんにインタビューしたことを子どもたちに伝えた。牛川遊歩公園では，朝早く近所の人がごみ拾いを行っていることを知ったＡ児は「みんながんばっているのを実感しながらがんばりたい」と，振り返った。自分たち以外にもまちづくりをしている人がいることを知り，地域とのつながりに気づき始めた。更に「地域の人たちは，他にどんなまちづくりをしているのか気になる」と，地域の人たちのまちづくりについて関心を高めるとともに，次時への課題をもつことができた。

（９）地域の人たちはどんなまちづくりをしているのだろう

子どもたちは，地域の人たちがどんなまちづくりをしているのかを自分が見たことや家族から聞いたことをもとに共有した。子どもたちからは，ごみ拾い・校区夏祭り・見守り隊などがあがった。中には「通学路で，いつも草を抜いている人がいる」と気づいた子がいた。そこで，その方に，何のために毎日草を抜いているのかを聞いた。すると「子どもたちの安全のことを考えて，車道と歩道の見晴らしがよくなるように」と，子どもたちのことを考えて行っていたことがわかった。自分たちのことを考えてやってくれていたことを知り，子どもたちは驚いた。地域の人たちのまちづくりを知り「感謝を伝えたい」「自分たちもまちづくりをしていくことを伝えたい」という声があがった。Ａ児は，振り返りに「人とつながりながらまちづくりをするために，ぼくたちもせっきょくてきにまちづくりを行うべき」と，記述した【資料５】。地域の方のまちづくりを追究した結果，自分たちがまちづくりをすることで地域の方とのつながりを生み，そのつながりが住みやすいまちに直結すると，まちづくりに対する考えを深めることができた。

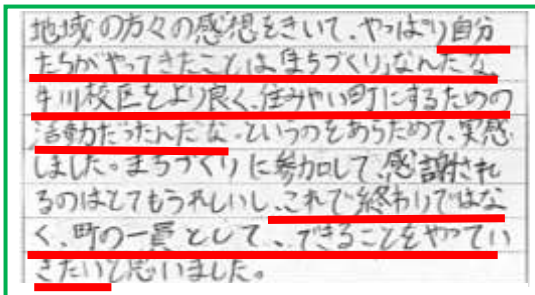

地域の人々が校区のために町づくりをしていることから人とのつながりをつくることで住みやすい町につながると思ったのでぼくたちは人とつながりながら町づくりをするために，ぼくたちもせっきょくてきに町づくりを行うべきだと思いました。

【資料５】Ａ児の振り返り

（10）これからはぼくたちもまちづくりをしていくよ

11 月中旬，創立 150 周年式典が行われた。６年生は式典に参加し，発表する場が設けられた。子どもたちは，地域の人への感謝の思いを伝えたり，自分たちもまちづくりをしていくことの決意を表明したりした。参列をした地域の方々に，子どもたちの発表を聞いて，評価をもらった。地域の人からの評価を聞いて，Ａ児は「自分たちがやってきたことはまちづくりなんだな。牛川校区をより良く，住みやすいまちにするための活動だったんだな」

と，実感した【資料６】。自分たちの学びが実社会とつながっていることを実感することができたと見て取れる。更に「これで終わりではなく，まちの一員として，できることをやっていきたい」という記述からは，本研究を通して，地域に対する思いや関心を高め，社会参画の意義を理解し，牛川校区の一員として，まちづくりに今後も参画しようとする気持ちを高めることができたということがわかる。


地域の方々の感想をきいて、やはり自分たちがやってきたことは「まちづくり」なんだな。牛川校区をより良く、住みやい町にするための活動だったんだな、ということをあらためて、実感しました。まちづくりに参加して、感謝されるのはとてもうれしいし、これで終わりではなく、町の一員として、できることをやっていきたいと思いました。

【資料６】地域の方からの評価を聞いて（Ａ児）

５　研究の検証と考察

（１）仮説１について

手だて①　探究的プロセスの設定

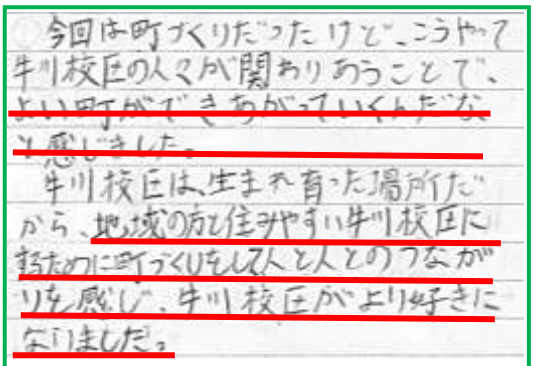
探究のプロセスを繰り返し位置づけたことで，Ａ児はさまざまな場面で課題を見出し，解決しようと探究することができた。そして，新しくできる公園の案を考えたり，体が不自由な人のために車椅子を購入しようとしたりするなどして，結果的に地域社会に参画しようと自ら動き出そうとする主体性をもつことができた。以上のことから，手だて①は有効であった。

手だて②　まちづくりに関わっている方（市役所の方）との関わり

まちづくりに関わっている方との関わる機会は，単元の中で３回あった。Ａ児を含め，子どもたちが目の前の課題を解決するにあたって，まちづくりに関わっている方の存在はとても大きかった。上記のように，まちづくりについての知識を教えてもらったり，新たな問いを投げかけてもらったりすることで，子どもたちが見出した難しい課題にも子どもたちどうしやまちづくりに関わっている方と協働的に探究することができた。以上のことから，手だて②は有効であった。よって，仮説①は妥当であった。

（２）仮説２について

手だて③　地域教材の活用


今回は町づくりだったけど、こうやって牛川校区の人々が関わりあうことで、よい町ができあがっていくんだなと感じました。
牛川校区は、生まれ育った場所だから、地域の方と住みやすい牛川校区にするために町づくりをして人と人とのつながりを感じ、牛川校区がより好きになりました。

【資料７】単元後のＡ児の振り返り

単元後のＡ児は振り返りに「牛川校区の人々が関わりあうことで，よいまちができあがっていくんだな」「地域の方と住みやすい牛川校区にするためにまちづくりをして人と人とのつながりを感じ，牛川校区がより好きになりました」と，記述した【資料７】。地域のまちづくりに気づき，自分たちもまちづくりをすることで地域とつながるとＡ児は考えた。更に，地域の人々と自分たちがともにまちづくりをすることで，住みやすい牛川校区になると気づくことができた。また，自分たちがまちづくりをすることで人と人とのつながりを感じ，結果的に生まれ育った牛川校区により愛着がわいたと見て取れる。まちづくりを通して，地域とのつながりを実感することができた。以上のことから，手だて③は有効であった。

手だて④　まちづくりに関わっている方や地域の方からの評価

まちづくりに関わっている方や地域の方からの評価を受け，自分たちの学びが実社会とつながっていることを強く感じ，今後も地域社会に参画しようとする気持ちが高まっていることがわかる【資料４・６】。また，車椅子を購入するために活動を継続することができている。以上のことから，手だて④は有効であった。よって，仮説２は妥当であった。

６　成果と今後の課題

「地域のためにできることはしたいけど，何ができるかはわからない」と，単元前に言っていたＡ児を含めた子どもたちが，探究学習を通して，地域のためにできることを考え，実際に行動することができた。本研究を通して，牛川校区の一員としての自覚をもちはじめ，地域社会に参画したり，今後も参画しようとしたりする子どもたちの姿は大きな成果である。今後も，総合的な学習の時間において，子どもたちが切実感をもって探究できる課題を設定できるように，地域教材の開発に力を入れていきたい。